

加賀騷動

村上元三



青樹社刊

昭和三十九年十一月一日 印刷
昭和三十九年十一月五日 発行

定価四五〇円

著者 村上元三

発行人 土井 勇

印刷人 山 森 忠 一

発行所

有限会社 青 樹 社

東京都千代田区神田三崎町二ノ三〇

電話(261) 九七六六番

振替東京 四七六四八

乱丁・落丁はお取替え致します

加
賀
騷
動

裝幀
中
村
貞
以

鳶 と 鷹

火消同士が消口を争う、というのは珍しいことではないが、今日の火事のように、火消が三つ巴になって争ったのは、はじめての出来事であった。それも、公儀の定火消と前田家抱えの加賀鳶、おまけに町火消までが加わっての消口争いなので、肝心の火事が二の次になるような騒ぎになった。

享保十五年の、まだ松がとれたばかりの日で、去年から一と月越しの旱天に続いて、それほど勢いは強くないが、肌を凍らせるような北風が、朝から江戸の町に吹いていた。

火元は上野不忍池の西岸、茅町一丁目の町家で、炬燵の灰をごみ溜めに捨てたところ、まだ火が残っていて、ごみ屑が燃えはじめ、気がついた時には、羽目板から屋根の庇へ、もう火が燃え移っていた。

時刻は正午を廻ったばかりで、昼火事は人の眼につきにくいので大事になり易い、といわれるが、この日の火事も、騒ぎが大きくなって町火消が駆けつけてきたときは、火の手は、往還を南へ越えた茅町一丁目から教証寺を覆いつくし、湯島の切通しのほうへ押しよせていた。

風下には幕府の学問所の聖堂や神田明神があり、西のほうには水戸屋敷と加賀屋敷がある。おまけに、火事の起ったあたりから湯島、仙台東へかけては旗本屋敷、公儀の組屋敷がいくつもあって、その間に町家が入り組んでいる、という簡単に火がかりの出来にくい場所であり、火の手は大きくなるぞ、という予想が誰にもすぐに感じられた。

浅草蔵前から下谷広小路、池の端、神田明神下、本郷湯島へかけては、町火消八番組は、わ、か、たの四組の持場所なので、八番組の大纏四本を押し立て、頭巾に刺して身を固めた鳶の者たち二百人ほどが、「ありやうや」と声をあげて火事場へ駆けつけてきた。

籠目の笠に将棋駒の形に八番組と書いた纏、打出の小槌の形のわ組の纏、その二本が真先に、雲のひくく垂れこめた空の下に馬簾をなびかせ、梯子、刺又、釣瓶、溜籠などの火消道具をかつぎ、煙をくぐって町鳶が飛び込んできた

時、火と煙は湯島天神の境内を真黒に押し包み、うなりをあげて三組町の中間屋敷へ襲いかかっていた。

その風下のほうから足並そろえて散開しながら進んできたのは、お茶の水一帯を受持場所になっている公儀の定火消番、五千石の旗本久世三四郎を頭とする二百人ほどの一隊であった。この久世三四郎は、寛永のころの名高い暴れ旗本久世三四郎を祖父に持った男で、年配はもう五十に近いが、この泰平の世の中で祖父ゆずりの喧嘩好きな血を持て余しているのだ、こういう火事騒ぎになると、まるで戦いにでも出るように勇み立ち、鍔頭巾と火事装束に包んだ二十貫豊かなからだを、馬上で躍り上がり躍り上がり、顔を真赤にして力み返っている。

「町火消どもに消口とらすな。かかれ、かかれ」

と采配を打ち振り、あとに続く騎馬の与力六騎、徒歩の同心三十人、組下の火消中間百数十人はどへ、勢い込んで下知をしながら駆けてくる。

もう竜吐水では火は消せない、と見たので、八番組の町火消たちは、妻恋町の町家に駆け上って屋根瓦を引きはがし、家を鳶口で引き倒し、丸太で押し潰し、破壊消防に取りかかった。その一方で、八番組の大綱四本は、近くの町

家へ立てかけた梯子をよじ登って、消口を取ろう。と競い合った。

それと見た久世三四郎は、鞍の上にのび上がり、顔中を口にして喚き立てた。

「ええ、町火消が消口をとるぞ。それ、負けるな、かかれえ」

こうなると、早く火事を消すことよりも、消口の一歩乗りが当面の勝負になり、定火消番の中間たちは、町火消の立てかけた梯子を引き倒し、自分たちの梯子を煙に包まれた町家に押し立て、禰一本の素っ裸で屋根へ駆け登ろうとする。

「ガエンにひけを取るな」

と町火消たちも殺氣立ち、そこ此処で、もう双方の小ぜり合いが始まった。

定火消の人足、いわゆる火消屋敷の中間は、市中ではガエンと呼ばれ、ごろつきが多いので町家からは嫌われているし、自然、町鳶とは仲が悪い。

双方が睨み合っているところへ、半鐘、板木、人の叫び声などを圧倒して、どどどと規則正しい足音を響かせ、火事場へ繰り込んできた五十人ほどの一隊があった。

指揮をとっているのは騎馬の侍で、鍔頭巾に火事羽織、赤地に金角つなぎの胸当てをつけている。これは、加賀家一番火消の奥村長左衛門という武士で、あとに従うのは名代の加賀鳶であった。

大形の雲に稲妻を染め出した長半纏に、鼠色の頭巾、銀塗太鼓を型どった大纏を振って進むのは、頭に目代、小頭に右足と、前後一様に揃えて押してくる。いずれも背丈は六尺以上、面つきのたくましい者ばかりを揃え、髭は刷毛先をきれいに散らし、鬚は抜き上げてすき額、茶色の地に斧の打っ違いの紋を染めた皮羽織、頭巾をかぶり、五尺の長鳶をさげて走ってくる有様は、さすがに加賀百万石が自慢の、つぶ選りの鳶の者だけあって、町鳶やガエンにはない一系乱れぬ統制と格式を具えている。

「それ、火を消しとめよ」

と長左衛門の下知をする声に、ガエンと町火消の睨み合には眼もくれず、加賀鳶は見る間に丁字型に陣を張り、いま消口を争っている町家の隣に梯子を打ちかけ、するすると纏持ちがそれを駆け上った。一方では竜吐水を三方から火へそそぎ、あざやかに働きはじめた。また二十人ほど

は、押しよせる弥次馬を追い払い、梯子で垣を作って火事場へ近づけまい、と日頃の鍛錬を発揮した美事さであった。

加賀鳶は、本郷にある前田家上屋敷の防衛と、公儀の命で市中の要所へ消火に出動する、という仕事のほか、聖堂の火消役が加賀藩の任務でもあった。だから、風下にある聖堂を守るために繰り出したのだが、その一方では、町鳶や定火消を出し抜いて消口を取ってくれよう、という意地が、指揮者の奥村長左衛門や加賀鳶の者たちにも、充分ある。

「加賀鳶が消口をとるぞ、おくれるな」

定火消番の久世三四郎は、それと見て喚き出し、いきり立って馬から飛びおりようとした。

ガエンと町火消の仲が悪いように、加賀百万石の威勢をかさに着る加賀鳶に対するガエンの反感も、こちらが旗本の面目を背負っているだけに、猛烈なものであった。

いま、わ組の纏持と屋根の上で揉み合っていた素っ裸のガエンたちは、頭から火の粉と煤をかぶった姿で、身をおどらせて隣の屋根へ飛び移り、いきなり手かぎを振りあげ、加賀鳶へ打ってかかった。

「何をしやがる」

「叩きのめせ」

血の気が多く、喧嘩っ早い事ではガエンに引けはとらぬ加賀鳶たちは、黒い煙に包まれ、足元へ火の舌が這っている屋根の上で、これも長鳶をふるって、打ち合いをはじめた。

「加賀鳶二番手、消口」

と小頭が、揉み合う中で大きく叫んだとき、ガエンの三人が飛びかかって、銀塗太鼓の加賀家の纏に手をかけ、引き落そうとした。

「あとへ引くな、纏をとられるな」

屋根を伝って走ってきた加賀鳶が、足場の悪いところでガエンたちと揉み合ううちに、

「久世三四郎消口」

となりの屋根から、大きな声が聞えた。

久世鷹くせたかといわれる、鷹の羽を二枚ならべた紋を染めた纏を押し立て、久世の組下の同心二人ほどが、裸のガエンたちに守られて立っている。

それを見た奥村長左衛門は、あぶみに足を張って鞍の上に立ちあがり、血相変えて叫んだ。

「お家の纏に手をかけられ、消口を奪われては前田家の恥辱だぞ。引くな、引くな」

こうなると、いままでの町火消とガエンの喧嘩は、ガエンと加賀鳶の争いに変ってきた。

三すくみのようではないながら、ふだんから仲の悪い大名火消と旗本火消の喧嘩になった以上、町火消の割って入る余地はなくなり、いつの間にか八番組の籠目や打出の小槌の大纏は、火と煙の渦うずからほかへ退いて行つた。

「加州家へ申し入れる」

と、烈火のようにいきり立った久世三四郎が、馬を煽ふって駆けよつてきた。

「これは久世三四郎手の者にて押えたる消口を、横合いから奪い取る気か。理不尽な」

「理不尽は、そなた様でござろう」

と奥村長左衛門も、熱気で煽られた顔に青筋を立て、竿立さだたてちになる馬の上から怒鳴り返した。

火を消すよりも、大名と旗本の意地にかけて、あとへは引けぬ角突つうき合ひであった。

大槻伝蔵

喧嘩という興奮が手伝ったせいか、消口争いの破壊消防が功を奏したのか、火事はその妻恋町の町家で消しとめたものの、納まらぬのは定火消と加賀鳶の睨み合いだった。

屋根瓦は落ち、半焼けになった隣同士の町家の屋根に、銀塗太鼓と久世鷹の纏が、それぞれ押し立てられ、ガエンと加賀鳶が、めいめいの消口を守っていた。

焼け焦げた匂いのたぐやう往還には、まだ煙がたなびき、家からほろり出された家財道具が大掃除の最中のようになり重なり、遠巻きにした弥次馬が見物している中で、旗本の久世三四郎と前田家の奥村長左衛門が、まだ互いに先陣を争って論戦を続けている。

町火消たちは、こうなれば大名と旗本の喧嘩、こっちの知った事ではない、と傍觀者の立場で、それでも道に大纏を立てて、成行きを見守っている。

「ただいまの争いにて、拙者の手の者にも怪我人が生じたが、家来の儀は苦しからず。ただ、上様よりつけられた大下の御扶持人も有る事ゆえ、組下の与力同心が承知せぬ」と久世三四郎が、旗本という身分を楯にとって罵ると、奥村長左衛門も、

「それなれば、われらにも聖堂守護の役目にある加賀藩の面目がござる」

一步もゆずらず言い返しているうちに、低い雲のようにただよう灰色の煙の下をくぐって、馬蹄の音が近づいてきた。

馬上の侍は、火事装束ではなく、騎射笠に馬乗羽織といういでたちで、徒歩の者五人ほどを連れてくる。

互いに馬上で言い争っている二人のほうへ駆けよると、その侍は、馬から跳ねおりて、

「奥村氏、お控え下さい」

よく透る澄んだ声をかけてから、笠をとり、久世三四郎の馬前へ近づいた。

二十六七歳でもあろうか、面長で色の白い、眉も鼻筋も唇も優しい感じのする、ただ眼つきだけは鋭い、すらりとした長身の侍であった。

「久世三四郎様とお見うけ致します。わたくしは前田中将が家来、大槻伝蔵と申する者」

と小腰を屈め、いんぎんに、しかし卑屈な感じはない態度で名乗ってから、

「ただいまの事、あなた様のお手と、われら加賀の火消と双方同時に消口をとり、火を消しとめた、となされては頂けませぬか」

「しかし」

と言いかける三四郎へ、下から伝蔵は、押しかぶせるように、

「あなた様お手の者、また加賀藩の火消、それに町火消、三方ともに怪我人も出しました事ゆえ、大公儀お使番、お目附などのお出張りと相成つては、この上の怪我人が出るやも計り知れませぬ。われらの無礼、改めてお詫びにまかり出ますゆえ、本日のところは何卒」

相手に一言もいわせないほど流暢な言葉づかいであり、その落着き払った態度を見ると、久世三四郎も反感を覚えるのとは逆に、やっと自分も冷静を取りもどしてき

た。

大槻伝蔵という侍の態度が、明るく素直であり、好感が

持てるのが、三四郎に自分の立場を省みさせるだけの余裕を与えた。このまま意地になって加賀藩と争つても、先方や自分の組下に我怪人が出た以上、使番や目附に割り込まれては事が面倒になる。いや、その面倒な事も、加賀百万石を向うに廻してなら、やり甲斐があるというものだが、いま大槻伝蔵の言つたように、双方同時に消口を取つたとすれば、意地の立たぬ事もない。

祖父とは違って、いくらか泰平の世に慣れて打算の働くところもある久世三四郎は、伝蔵の言う通りにしたほうが有利だ、とさとした。

「勘忍なり難いところだが、そのほうの扱いに免じて、勝負は互角という事してくれよう」

それだけ言つて久世三四郎は、馬首をめぐらし、湯島のほうへ引返して行つた。

三四郎の退き際に鮮やかだったので、奥村長左衛門は、いきり立っている鼻の頭を叩かれた心地になると、

「大槻、出すぎた振舞いすな」

と、こんどは伝蔵を睨みつけた。

奥村は、前田家一番火消という役目は兼役で、本役は大將組四百石取の身分であり、伝蔵に対しては、この成上

り者が、という反感が強い。

加賀の前田家には、前田土佐をはじめ八家といわれる名門があり、横山、本多、長、奥村、津田、玉井などの老臣が代々、重役の地位についている。この奥村長左衛門は、八家の中の奥村内匠の一族であり、自分は名門、大槻伝蔵のような禄高二百三十石の組外組、いくら当主の加賀吉徳の信任が厚いといっても、茶坊主上がりの若侍などに出すぎた振舞いをされては、という怒りがあつた。

「文字通り火急の場合ゆえ、ご容赦を願いまする」

と伝蔵は、奥村の怒りを、ふわりと微笑で受け流して、
「それより怪我人の手当、火事場の跡始末が肝要かと心得ます」

「おぬしの指図は受けぬ」

伝蔵より二十歳も上という自分の年も忘れ、子供の喧嘩のような怒り方をしている奥村をそのままに、

「奥村どのお下知を受けよ」

と、加賀鳶を率いてきた侍たちに声をかけながら、自分は袴の股立をとり、てきぱきと怪我人の始末をはじめた。

定火消の同心やガエンたちの怪我人は、久世三四郎が勝手にやるとして、加賀鳶の中にも喧嘩で傷をうけた者が八

人、火がかりで火傷や打撲傷を負った者が、十人ほどあつた。

伝蔵は、氣を利かして藩医の中村正伯も連れてきていたので、それぞれに応急の手当をさせ、歩ける者はともかく、身動きも出来ぬ者は近所から借りさせてきた戸板に乗せ、手まわしよく加賀屋敷のほうへ送り返した。

八番組の町火消は、火の消えた火事場にまだ残って、消口は取れなかつたにせよ、家を焼かれた町家の者たちの世話や、立退き先の面倒を見る、などという仕事に當つてゐた。

それを見ると、伝蔵は、藩医を連れて、町火消の固まつてゐるほうへ引返して行つた。

「怪我人はおらぬか。そのほうたちの者の中にも傷をうけた者がおらう。手当をしてつかわすが」

声をかけると、五十年配の頭取と見える男が、むっとした顔で進み出た。

「か組の頭、音右衛門と申す者でございます」

と名乗ってから、煤と汗で汚れた顔に怒りの色を浮べながら、

「わっち共の怪我人は、わっち共で手当を致します。それ

よりも、とばかりをうけて怪我をした娘さんがおりますから、見てやっておくんなさいまし」

そう言つて指さした向うに、町鳶たちに囲まれた中から、女の泣声が聞えていた。

伝蔵は、そのほうへ近よつて行つた。

ごつた返した火事場の焼跡に、これは花が咲いたように、十七八の町娘がひとり、四十年配の女に抱えられてうずくまっている。

泣いているのは年配のほうの女で、娘は氣を失つてゐらしい。仰向けになつた顔から血の氣が引いて、髪や着物に火の粉をかぶつたのだらう、汚れ、乱れている。右の足を、へんな風に曲げて、まるで、息をしていないように見えた。

「お貞ちゃんや、しっかりするんだよ。お貞ちゃんや」

女は、しきりに娘の身体をゆすぶつて、泣きながら声をかけるのだが、それも聞えないのか、ぐつたりとしたまま娘は返辞もしない。

「どうしたのだ」

伝蔵は、女に声をかけた。

いきなり侍にそう言われて、女はびっくりしたらしい

が、まわりの町鳶たちにはげまされ、やっと震えながら涙声で答えた。

女はおせんといつて、いまの火事で焼けた妻恋町の長屋に住んでゐる者で、亭主は吉蔵といひ、三組町のお駕籠の者長屋の中間で、自分は針仕事をして暮している。この娘は、姪に當るお貞といつて、自分の兄で芝浜松町に八百屋渡世をしてゐる伊兵衛の姉娘だが、昨夜から泊りがけで遊びにきていて、この火事に會つた、と申し立てた。

そこへ、か組の頭の音右衛門がやつてきて、おせんの話へ説明をつけ加えた。

「よほど氣の勝つた娘さんらしいやうでございます。叔母といふこの人が、着のみ着たままで逃げ出そうというのを、叱りつけるようにして家財道具を運び出してゐた、と申します。それで、逃げるのが遅れたんでございましょう。煙にまかれ、外へ飛び出したのが、加賀様の鳶とガエンが、やあやあと喧嘩をおつ始めた真つ最中。この娘さんは飛ぱつちりをくつて、もろに二間ほど突きとばされ、氣を失つたのだそつでございませう。身体が大きき、火事装束の男が片手で突いた、と申しますから、加賀様の鳶に相違ございせん」

伝蔵に文句をつけるように、べらべらと音右衛門がまくしたてるのを、伝蔵はだまって聞き流しながら、藩医の中村正伯を手招きし、お貞という娘に手当を加えさせた。

力士のような身体をした者ばかり揃えてある加賀蔦のことで、おまけに氣も立っている、それに力一杯突き飛ばされたので、お貞は氣を失い、右足を挫いていた。

「ほかに怪我はございません。このような美人ゆえ、顔に傷でも受けては大ごとでございましたな」

と、応急の手当をしながら、中村正伯が、伝蔵にそう言った。

おせんという叔母は、氣も動顛どうてんしているので氣を利かせる余裕はないが、正伯が無遠慮にめくりあげた娘の足の白さが、まわりを取囲んだ町蔦たちの視線を集めた。

赤いものがからんで、細い乳色の光沢をおびた娘の足が、殺風景な火事場の中だけに、ことに美しく、可憐かへんに見える。

大ぜいの男たちの眼にさらすのが、無残な氣がして、町蔦の連中の眼からその娘をかばうように、伝蔵は間へ割って入りながら、

「駕籠かごを二挺ふたよう、頼んできてくれ。行先は、芝浜松町」

と、頭の音右衛門に言いつけた。

「何か副木うきぎのようなものを」

正伯が言ったが、焼跡では副木の役に立ちそうなものが見当らず、伝蔵は、とっさに氣がついて、袴にはさんであった自分の白扇はくせんを抜いて渡した。

それを正伯は、娘の膝ひざに当て、用意の巻木綿まきもめんでぐるぐる巻いた。

ようやく娘は氣がついたらしい。叔母の膝の上で、うっすらと眼を開き、のぞき込んでいる伝蔵の顔に氣がついたようだった。

暗いところから陽だまりへ出された小鳥のように、まぶしそうに眼を開き、お貞という娘の顔に恐れの色がひろがったが、急に、誰か自分の足を握っているのに氣がついたらしく、

「あれ」

かすかに声をあげ、足を引き込めようとした。

「待て、待て。もう少しだ」

正伯は無慈悲にむずとお貞の足を押えたまま、巻木綿を巻き終えた。

悲しそうな、恥かしそうなその娘の顔を、伝蔵は眼に見

えない強い力で引かれるように見詰め、まわりに町鳶や弥次馬のいることも忘れかけていた。

前田百万石

そのあくる日の午すぎ、在府中だった前田加賀守吉徳は、表面は晴れ晴れとした面持で、内心には不快なものを含んで、江戸城から本郷の加賀上屋敷へ帰ってきた。

加越能三カ国百万石の前田家の当主としては、今日は將軍吉宗から諸侯の面前で礼の言葉をうけ、面目をほどこした事になるが、私的には殿中の大廊下で姉夫妻の事に關して、面白くない噂を耳にしたからであった。

加えてもう一つ、昨日の本郷の昼火事で、自分の屋敷の鳶の者たちと定火消の旗本久世三四郎の手の者が喧嘩をした、という一件もある。

「昨日の事は、御老中松平左近將監様のお耳にまで入ったそうでございますが」

と、吉徳が屋敷の居間に入ると直ぐ、江戸詰の年寄の本多安房守と、国許の金沢から供をしてきている家老の前田勘解由、玉井市正の三人が揃って伺候し、安房守がそう報告した。

「今朝来、お若年寄をはじめ、町奉行大岡越前守の役宅までまかり越し、事を丸く納めて参りました」

「そのほうたちが参ったのか」

「いえ、大槻伝藏の働きにございます」

と、これも伝藏に好意を持っていない前田勘解由が、あはだのある顔に不快そうな色を浮べ、しぶしぶ答えた。

「ふむ」

それには一つうなずいたきりで吉徳は、今日、將軍家からうけた礼の言葉を、家老たちへ伝えた。

前田家は、一昨年、幕府へ七万五千兩の金を用立てている。それは昨年の暮に返済されるという約束だったが、吉徳から老中の松平左近將監を通じて、返済の期限はお延し下されても苦しからず、と申し出てあった。

將軍は吉徳の意を容れ、今日あらためて直接に礼の言葉となり、唐犬一匹と鶴を贈られる、という事になったのだった。

それを聞いた家老たちは、めいめい吉徳に祝いの言葉をのべ、前田勘解由が老中の許へお礼言上に出る、と決ったが、吉徳は浮かぬ顔をしていた。

ことし吉徳は四十一歳になる。先代の綱紀は、六年前に八十二歳の高齢で江戸で歿し、諡名して松雲公という。前田家中興の祖といわれ、政治にも功績をあげ、武勇を好んだ一面、非常に学問の好きな名君であった。

外見はその父に似て、吉徳は背が高く、健やかな身体つきをしている。色は黒く、頬骨が高く、乗馬と打物を好み、精力家なので、側室の数も一人や二人ではない。

それに進取的な気性でもあったので、前田八家といわれる重代の老臣たちから事ごとに補佐されるのを好まず、自分から直接に政治を見ることに専心した。

藩治に功をあげるためには下情に通じなければならぬ、という意慾が強く、茶坊主上がりでも世情に慣れた大槻伝蔵を寵愛しているのも、それが理由の一つであった。

「そのほうたちは退って、大槻を呼べ」

と、吉徳が言うと、予期していたように、前田勘解由が膝を進めてきて、

「大槻へのお賞めのお言葉なれば、わたくし共も列座仕り

たいと存じます」

「そうではない。そのほうたちに頼めぬ事だ」

重臣たちが嫌な顔をするのを承知で、吉徳は、ずけりと言った。

今日、殿中の大廊下で耳にした姉夫婦のことは、公式に表面に口に出せることではない。吉徳の姉は節子と言い、芸州広島四十二万石、浅野の本家松平安芸守吉長の妻にっている。安芸守は四十八歳、節子は三つ年上の五十一歳、弟の吉徳に似て今板額の安芸の御前、と呼ばれているほど、武勇に長じた女丈夫であった。

夫の安芸守吉長は、大名として藩治については欠点は無いが、名うての女道楽であり、新吉原の傾城を二人まで身請して、側室とし、この二三日、芝神明の蔭間茶屋に入りびたりになっているという。大名にあるまじき不身持、というのが殿中にまで聞えていて、今日、それが吉徳の耳に入ったのであった。

弟として姉のために、なんとか穏かな方法を講じなければ、と思索すると、その相談相手になるのは、大槻伝蔵よりほかには考えつかなかった。

「わたくし共では、お役に立ちませぬか」

と、五十をいくつもすぎている本多安房守が、面白くない顔つきで、無遠慮に問い返した。

「そうだ、高祿取りの家来たちでは果せぬ事もある」

と言って吉徳は、ときどきこみあげてくる老臣たちへの不満を打ちまけるように、はははと笑った。

蔵 開 き

「心利いたる家来がおらぬようで面目ないが、ご家老がたも、たびたびご意見は申し上げておる。しかし、さよう致せば致すほど、かえって、み気色を損ぜられてな、なおのことご遊興の度を加える、ということに相成るので、全くもって家臣一同、困り入っているのだが」

霞ヶ関の浅野上屋敷から同道してくれた安芸守吉長の江戸公用人太駄源七郎という侍が、しきりにくどくどと言訳めいたことを言うのへ、大槻伝蔵は、うなずきながら黙って歩いていた。

自分の主君、前田加賀守吉徳が、いつも老臣たちに反感を感じているのを、伝蔵もよく知っている。それとは、立場と事情こそ違うが、浅野吉長が奥方の節子の方に頭を押えつけられまいとしている気持が、よくわかるような気がする。人情に变りはない、と思うものの、しかしこのほうは芸州広島四十二万石の太守という立場にあることだし、同情が出来る、で済ませる問題ではない。下々の者なら、女房がいやだから遊んで鬱さを晴らす、というのはさらにあるだろうが、浅野吉長の場合は、そう簡単には片づけられる事ではない。ことに、節子の方が自分の主君前田吉徳の姉であり、今日は吉徳からの内意をうけた役目にあるだけに、ずいぶん肩の凝る思いがする。一方では、ばかばかしいとも考え、また伝蔵の肚の中では、こういう役目を上手に果すことも出世の早道になる、といった打算が働いていたのは事実であった。

「前田中将様のお耳へも入ったとなれば、もはや殿中にも知れ渡っている事かと思うが、なるべく事を穏便に、市中の者たちの取沙汰にならぬよう計りたいと存ずるが」

太駄源七郎は、しきりに愚痴めいたことを口走るが、それには何うすればいいか、という具体策はあまり考えつい